

ONCC 第 11 期

～江戸時代にタイムスリップ～

テーマ：浮世絵で見る江戸時代

2023年9月6日（曇天） 10:00～12:00 北大阪生涯学習センターにて講義を受ける

13:30～15:30 於：大阪浮世絵美術館&府立上方演芸資料館見学

受講生 25 名+CA2 名（広瀬&岸本の両氏） 計 27 名の参加 （担当：第2班）

本日のテーマ「浮世絵で見る江戸時代」の講義は、午前中に北川博子講師より受講、午後は大阪へ移動、心斎橋の“大阪浮世絵美術館”の見学、引続き難波の大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）に於いて、当館の中西学芸員の説明を受けながら見学した。

江戸時代の美の筆頭は浮世絵で大衆向けの絵画として発展した。人々の遊びや楽しみなど風俗を題材として取入れられ、中でも歌舞伎役者の似顔絵や江戸の女性を描いた美人画が広くもてはやされていた。浮世絵は肉筆（黒摺絵）の一点物で始まった様だが、江戸時代中期には大半が木版画に移り、色彩物（丹絵・漆絵・紅絵・紅摺絵・合羽摺）が更に多色化し、その頂点とも言える“錦絵”に発展、浮世絵自体が歴史的に大きな変化を成し遂げたとのこと。

浮世絵の魅力の一つは木版画だ。それに自由で大胆な構図に簡潔な色使いや極彩色の色使いが加わり、木版画が最終段階の技法となり、以降は錦絵以外の浮世絵版画は殆ど制作されなくなった様だ。以後、風景画（名所絵）を筆頭に武者絵・戯画・花鳥画・玩具絵・歴史画・春画 等々の題材で、色鮮やかで且つ、面白く楽しい浮世絵は、庶民の身近な娯楽物（文化財）として広く行き渡った。制作には、先ずは絵を描く絵師（作家）がいて、絵を彫る彫師、そして顔料をつけて摺る摺師、各々専門職人の技術から生まれたもので、現代的には高評価・高価値、貴重な文化財であろう。

絶大なる人気絵師と言えば、歌麿・写楽・北斎・広重・国芳・芳年。特筆すれば北斎「富嶽三十六景」の神奈川沖浪裏。広重「東海道五十三次」「名所江戸百景」の内、日本橋が傑作とされる。美人画は菱川師宣の「見返り美人図」、春信の「夜の梅」、歌麿は「婦女人相十品」「春画類」などで、写楽は役者絵、国芳はデッサンやアイディアに優れ、芳年は多種多様な題材を描き、各々を大ヒットさせた最後の浮世絵師とも言われている。

● 大阪浮世絵美術館（中央区心斎橋 2-2-23 不二家心斎橋ビル3F）

日本が世界に誇る浮世絵版画作品の展示施設、現在は「二人の天才 葛飾北斎・月岡芳年」展を開催中で、出展作品 56 点をほんの間近での鑑賞は、感激そのものでした。以下、四大巨匠の主な作品を掲載してみました。



北斎・富嶽三十六景「神奈川沖浪裏」



広重・東海道五十三次「日本橋」



写楽・歌舞伎役者絵



喜多川歌麿・美人画

● 大阪府立上方演芸資料館・ワッハ上方（中央区難波千日前 12-7 NAMBA ビル7F）

江戸時代の上方文化は、京・大坂を中心に衣食住を含めて、独特の美意識や価値観を見出してきた。そんな上方は「笑い」を中心とし、落語・漫才・浪曲・喜劇と言った大衆芸能が、盛んに演じられ広く大きく発展してきた。当館は歴史的に積み上げた大衆文化の基盤を、更なる発展に向け幅広くご理解を得るための広報活動の拠点である。